

# 逞筆模試

## 第九回

五月二十六日

(一) 次の傍線部分の読みをひらが

なで記せ。①～⑩は音読み、⑪～⑳

は訓読みである。

(30)  
1×30

- ① 間を過ぎて之に軾す。
- ② 荆詢の謀は庸いること勿れ。
- ③ 池鏡泓澄として日暉を含めり。
- ④ 玉漏声長くして灯耿耿たり。
- ⑤ 田に封漚有り、廬井に伍有らしむ。
- ⑥ 有司勅を奉りて二百の袷袢を造る。
- ⑦ 王逸曰く、美人は頬に鬢輔あり。
- ⑧ 禪師抖擻行脚して茲に挂錫す。
- ⑨ 潭心に月映りて金波漲る。
- ⑩ 峨峨たる巖、飄飄たる雲。
- ⑪ 覇者の民は驩虞如たり。
- ⑫ 牛の窓櫺を過ぐるが如し。
- ⑬ 苜蓿は化して芝蘭と為る。
- ⑭ 優游を崇好し、麴蘖を耽嗜す。
- ⑮ 青衫また馬蹄の塵に汚る。
- ⑯ 民殷く国富むも存恤を知らず。
- ⑰ 烽火岡巒に被る。
- ⑱ 百果草木みな甲拆す。
- ⑳ 出でて師旅を都肆せんとす。
- ㉑ 安心無き説経は田中の蠅蠹の如し。
- ㉒ 藁苞に黄金を包む。
- ㉓ 月満つれば則ち虧く。
- ㉔ 丘阜に攀つるあり、湖上に泓ぐあり。
- ㉕ 蠹を辟くる芸編、細細香し。
- ㉖ 秋の田の穂なみかがやく百鞞。
- ㉗ 江、碧にして鳥は逾白し。
- ㉘ 突然の黒栴葉書で胸騒ぎがする。
- ㉙ 中庭に雪は出巴と降り頻る。
- ㉚ 父君の憂いに丁たる。
- ㉛ 囁る時は則ち人の我を道う。

### 解答難度指数 1.89

(二) 次の傍線部分のカタカナを漢字で記せ。㉜、㉝は国字で答えること。

(40)  
2×20

- ① 屋号をヘンカクに揮毫した。
- ② 見事なバチサバキに御鳥目を投げた。
- ③ 屋根より高くコイノボリを立てる。
- ④ 君はサンかしびつくりするだろう。
- ⑤ ギクの念を抱いて頭を擡げた。
- ⑥ 基敵と毎晩シユエイを争う。
- ⑦ 御中元に栗入りのドoyaきを贈る。
- ⑧ 斜陽がヤマヒタの残雪を赫かす。
- ⑨ 賓客にシツボク料理を饗する。
- ⑩ 議場でその鋭いボウボウを表わした。
- ⑪ 凜としたタタズまいを見せる。
- ⑫ 以てメイするに足る名誉だろう。
- ⑬ 彼は健康志向でハイカ米を好む。
- ⑭ 草花喜ぶショウマンの節に入る。
- ⑮ 鉄中のソウソウ、傭中の佼佼。
- ⑯ 生涯にソウソウの変を幾度も見た。
- ⑰ 些細なカキンも厳しく咎めた。
- ⑱ 菜食主義なのでカキン類は食さない。
- ⑲ 芋ササを壁に塗り込む。
- ⑳ 傷持つ足はササラ。

(三) 次の1～5の意味を的確に表す語を、次の□から選び、漢字で記せ。

(10)  
2×5

- ① 冬の夜に打ち鳴らす拍子木の音。
- ② 大詩人の美称。
- ③ 人間の一切の活動をいう。
- ④ 東方の海。転じて、日本。
- ⑤ おしまい。物事の終わり。

かんたく・しくんし・しんくい  
せんとう・たくせん・とうえい  
ぼんでんこく

(四) 次の問1と問2の四字熟語について答えよ。

(30)

問1  
次の四字熟語の(①～⑩)に入る適切な語を次の□から選び漢字二字で記せ。

(20)  
2×10

- |        |    |     |
|--------|----|-----|
| (①) 死灰 | 懸崖 | (⑥) |
| (②) 同音 | 朝憲 | (⑦) |
| (③) 落溷 | 慧可 | (⑧) |
| (④) 成金 | 波詭 | (⑨) |
| (⑤) 晦迹 | 炊金 | (⑩) |

うんけつ・こうぼく  
しょうけい・せんぎよく  
だんぴ・ついりん・てんてつ  
とうこう・びんらん・ろくば

#### 問2

次の①～⑤の解説・意味にあてはまる四字熟語を後の□から選び、その傍線部分だけの読みをひらがなで記せ。

(10)  
2×5

- ① 同じ物でも地域で呼び名が異なる。
- ② 貧苦を凌いで勉励する。
- ③ 粗末な服装のたとえ。
- ④ 逸楽を食する者は自身を蝕む。
- ⑤ 方外の友を失うことの悲しみ。

断齋画粥・伯牙絕絃・荆釵布裙  
苟且偷安・越梟楚乙・南蛮北狄  
宴安酖毒・亮遺巾幘

(五) 熟字訓・当て字の読みを記せ。

- |      |        |      |
|------|--------|------|
| ① 瓢虫 | ⑥ 大口魚  | (10) |
| ② 水手 | ⑦ 雨久花  | 1×10 |
| ③ 山茶 | ⑧ 杠谷樹  |      |
| ④ 矮鶏 | ⑨ 石陰子  |      |
| ⑤ 爵牀 | ⑩ 南五味子 |      |

(七) 次の①～⑤の対義語、⑥～⑩の類義語を後の□の中から選び、漢字で記せ。□の中の語は一度だけ使うこと。

- |      |       |      |
|------|-------|------|
| ① 寛仮 | ⑥ 断金  | (20) |
| ② 玉摧 | ⑦ 轎夫  | 2×10 |
| ③ 下春 | ⑧ 佳局  |      |
| ④ 冠者 | ⑨ 咽喉  |      |
| ⑤ 赤鴉 | ⑩ 虎皮下 |      |

(八) 次の故事・成語・諺のカタカナの部分漢字で記せ。(20) 2×10

- ① 真竜も勢いを失えば **キユウイン** に同じ。
- ② **コクサク** の道は鼻大なるに如くは莫く、目は小なるに如くは莫し。
- ③ **イツサン** を博す。
- ④ 我が身を **ツネ** って人の痛さを知れ。
- ⑤ **クンロ** の技。
- ⑥ 明珠 **ロウボウ** に出ず。
- ⑦ 大弁は **トツ** なるが如し。
- ⑧ 之を **トウクウ** に失い桑榆に収む。
- ⑨ **ウ** を好むに瑟を鼓す。
- ⑩ **ギントウ** の固きも粟に非ざれば守らず。

(六) 次の熟語の読み(音読み)と、その語義にふさわしい訓読みを送りがなかに注意して)ひらがなで記せ。

- ア ① 棋峙…② 峙つ
- イ ③ 頒賚…④ 賚う
- ウ ⑤ 闡并…⑥ 闡く
- エ ⑦ 靚閑…⑧ 靚う
- オ ⑨ 累紕…⑩ 累る

(九) 文章中の傍線(1.～10.)のカタカナを漢字に直し、波線(ア～コ)の漢字の読みをひらがなで記せ。(30) 2×10 1×10

**A** 嗚呼、大正の世人既に姦淫**ア**双翳の事を説いて以て盛世の佳話となす。此の時に当たつて僕独り耳を掩うて鄙語聴くに堪えずとなすが如きは、甚だ通俗の本旨に戻るものなり。苟も筆を通俗小説に**イ**挿れんとするもの為すべき所にあらざるや論を**ウ**俟たず。僕今芸者の**エ**ナガジュバンを購わんがために、わが生涯の醜事を叙し出して通俗小説に代え以て売文の貨を貪らんとす。老羸なお此の如くにして聊か時運に追隨することを得たりとせんか。幸い何ぞよく之に若くものあらんや。僕年甫めて十八、**カ**家嬢に戯る。『柳梅』に曰く「若旦那夜は拜んで昼叱り。」と蓋し実景なり。翌年独り芳原の小格子に遊び、三年を出でざるに、東廓南品、甲駟、板橋、凡そ府内の岡場所にして知らざる処なきに至る。二十四歳海外に渡航するや五代洲各国の**シ**ジョウシグンと戦を交え皆抜群の功あり。然れどもなお安せず、窃かに欺じて曰く宮本武蔵は**ニ**狝を退治せり。洋人の色に飢えるや綿羊を犯すものあり。僕未だ能く此に到るを得ずと。年三十にして家に帰るや、爾来ここに十有余年、追歛索笑虚日ある無し。妓を家に納るること数次。自ら旗亭を営むこと両度。細君を追い出してまた迎えること前後三人。今年、**サ**バシ蚤くも桑年に**オ**重として初めておくびの出るを覚えたり。

(永井荷風「桑中喜語」より)

**B** 大瀛の水沌沌渾渾、その勢い**ト**ウテンの如きも、その源を**カ**纒めれば、潺湲たる山間小流の湊合に非ずや。葱嶺の山**キ**ゼンとして雲表に聳え、將に天を摩せむとするの概あるも、その源を究むれば、微微たる路上細塵の集積に非ずや。その強国の以て雄大を致す所のものも、またその源を推せば、総角**キ**卵たり、紅鬢燦たる、可憐の兒女教育の発展に因するや、幾多の事実これを証して余りあるに非ずや。(…中略…)

今や我が邦の教育は、駸駸その**ホ**ホに進むが如しと雖も、仔細にその状を察すれば、實に寒心に堪へざるものあり。請う、内外の実例を挙げてこれを証せむ。

(肝付兼行「海島冒險奇譚 海底軍艦」より)

**C** 山東京伝、式亭三馬。共に中興の作家にして其の内容、世既に定論あり。今豈敢えて**マ**イするを要せんや。然り而して本館嚮に両作家の傑作を纂輯して世に行わるる此に久し。然りと雖もなお坊間に残存するもの頗る多きを以て三たび本篇に採録す。実に二十有餘種に出ず。それ併しながら必ずしも名著のみを網羅せしと云わざるも、また認めて以て各篇佳作を蒐集せしは論なし。只**マ**懐むらくは当年の**ケ**書賈、間事故の存するたりて中途の断版少なしとせず。故を以て其の二三は原意を敷衍し僅かに局を結べるあり。それ或いは **ホ**柄鑿の誹りあらんか。蓋し廢絶を起こして永遠に伝うの**ビ**チユウに外ならず。是非は江湖の識者に待たんのみ。遮莫全葉一千。濃艶、洒脱、優美、瀟灑、其の多種多様の筆致は、作家の真面目躍如**ホ**ウフツたるの処。**マ**繙聞一番明窓**シ**ヨウキの好伴侶たるを疑わざるなり。敢えて識す。

(「京伝三馬傑作集続・解題」より)

(注) 柄鑿…四角いほぞと円いあな。転じて、互いにくいちがって合わないもの。